山と戦争
——ジェフリー・ウィンスロップ・ヤングの第一次大戦詩——

佐藤泰人

はじめに

Grub for gold with prisoned life;
mint it at the price of breath;
let it bear the stamp of strife;
let it purchase power of death: —
Life and gold, one sweated bar,
lavish it on waste of war.

Dig the gold with good men's toil;
leave the holes for dead men's graves;
starve the growth, and hoard the spoil
stored in trenches, heaped on waves: —
Murder, lurking underground,
till the trump of Azrael sound.

Drain the gold, and forge the chain;
drain the strength, and bind the race;
rouse the brute in man to reign;
train him for his princely place: —
Flunkey to a nation's pride

in the lust of fratricide. (Young, *Freedom* 79)

監獄入りの命賭け　金の塊掘り起こせ
息と引き換え銭にして
戦の刻印押してやれ
そいつで買える　死の力
命と金とで一本の　汗水滴る延べ棒を
戦の浪費に使うがいい

善き男たちの苦しみの　力で金塊掘り起こせ
掘った穴はそのまんま　死んだ男の墓となる
育ちは飢えるままにして　略奪品を蓄えろ
塹壕に貯め　海に積み
地面の下に潜みつつ
死天使の吹く喇叭　鳴るまで人を殺すがいい

金を尽くして　鎖を鍛え
力を尽くして　民縛れ
男の内に棲む獣　起こして支配させてやれ
この獣を訓練し　王子の位につけてやれ
同胞殺しの欲に満ち
国の誇りに奉仕する　下男の地位につけてやれ

強弱格で憤る、「浪費」（'Waste'）と題されたこの詩は、第一次世界大戦時に書かれた一連の戦争批判詩に近似する。命とエネルギーの無駄な消耗や、国のプライドという建前に対する痛罵は、例えばウィルフレッド・オウェン（Wilfred Owen, 1893–1918）の「無益」（'Futility'）や「甘美にて正しき」（'Dulce et Decorum Est'）などを思い出させる。「浪費」がこれらの詩と異なるのは、しかし、それがイギリスの参戦前に書かれたということだ。「浪費」を収めたジェフリー・ウィンスロップ・ヤング（Geoffrey Winthrop Young, 1876–1958）の詩集『自由』（*Freedom*）は戦前に原稿がまとめられ一九一四年夏に出版されている。

本稿はヤングの第一次大戦にかかわる詩を扱う。登山家で詩人のヤングは一九一四年八月当時三十七歳。兵士として志願するには年を取りすぎていると感じた彼は[1]、まずジャーナリストとして戦地に赴き、次に救急隊を組織して終戦まで戦場で働いた。任務中に敵の砲撃により負傷し、左脚を切断。登山家生命にとって重大な損失を被る。しかしヤングは戦中戦後、上記のような戦争批判詩を書かなかった。第一次大戦に関わった詩人を網羅的に列挙した *The Cambridge Companion to the Poetry of the First World War* の詩人リストにヤングの名前はない[2]。ヤングという詩人は、第一次大戦との関わりにおいて捉えにくい存在である。彼は兵士ではなかったが、戦場で果敢に立ち働いた。フレンド会とともに救急隊を組織し、その副隊長となったが、クェーカーではなかったし、良心的兵役拒否者として自らを主張することはなかった。兵士の救護・看護というと女の仕事というイメージがあるが、彼の率いた救急隊は男の世界だった。また冒険的登山や戦闘は「男らしさ」のイメージがつきまとうが、ヤングはオウェンやサスーンらと同じくホモセクシュアルだった。戦争による心身の欠損は「男らしさ」の損失と結びつけられて考えられるが、彼は脚を失った後に、ホモセクシュアリティーを保持したまま異性と結婚して子をもうけ、義足で高山登攀に返り咲いた。

多作ではなく、モダニズムと無縁で、いわゆる「戦争詩人（War Poets）」とも異質であったヤングの詩には十分な注意が払われていない[3]。しかし、このような捉えにくさゆえに、第一次大戦と文学との関わりを検討することにおいて新しい光を当てることができるのではないかと本論は考える。ここで扱う時期のヤング詩についての先行研究は、筆者の知る限り皆無に等しい。第一次世界大戦とイギリス帝国と極地登山との関係を描いたデイヴィス（Wade Davis）の好著『沈黙の中へ――大戦、マロリー、エベレスト征服』（*Into the Silence: The Great War, Mallory, and the Conquest of Everest*）にはヤングが重要人物として登場するが、彼の詩業は無視された。しかし第一次大戦については、文学、歴史学、社会学などさま

ざまな分野における研究の集積がある。本論ではそうしたものの幾つか、とくに戦争における身体の欠損――それはすなわち男性性の損失と同一視される――とその回復についての知見を援用しつつ、ヤングが登山家の命と言ってよい脚を戦争で失ったことに焦点をあて、彼の詩において戦争と山岳とがどのように表象されうるのか考えていきたい。

ヤングの大戦詩と呼べる作品は戦後一九二三年に出版された詩集『四月と雨』（*April and Rain*）に収められている。「四月の歌」（'Songs to April'）と題された連作の六番「戦（いくさ）の崖に嵐がまだ吹き付ける」（While on our battle-cliff the storm still breaks）には「ヴェニスにて一九一八年」（Venice, 1918）という付記、七番「遠く海の眺めから冬の光」（'The wintry light from this far view of sea'）には「一九一八年イタリア前線」（The Italian front, 1918）という付記がある。同詩集所収の連作「山の気分」（'Mountain Humours'）の二番目に「この素晴らしき四肢（てあし）」（'These splendid limbs'）があるが、これはのちに『全詩集』（*Collected Poems*, 1936）において「山の気分」第一番の詩となり、題名も新たに「満ち足りて」（'Content'）とつけられ、さらに「一九一七年、サン・ガブリエレ山の戦いのあとで」（After the battle on Monte San Gabriele, 1917）という付記が加えられた。「山の気分」六番（『全詩集』では「山の気分」最終詩にして詩集全体の最終詩）の「長い日々の魔術をまだ失っていない」（I have not lost the magic of long days）も戦傷を扱っているといってよい。本稿ではこのうち、サン・ガブリエレ山に関わる「遠く海の眺めから冬の光」と「この素晴らしき四肢（てあし）」を扱う。

分析においてはヤングの散文が助けとなる。戦場ジャーナリストとしての記事をまとめ、一九一四年十月に出版された『塹壕から』（*From the Trenches: Louvain to the Aisne, the First Record of an Eye-Witness*）は最も早い時期の大戦ルポルタージュである。戦後、義足によって登山を再開し、一九三五年、六〇歳のときにツィナールロートホルン（Zinalrothorn, 4221m）山頂で引退を決意するまでの登攀の数々は、一九五一年に『ひと味違う山々』（*Mountains with a Differ-*

ence）として出版されたが、ここには大戦時のヨーロッパ戦線の山々についても描かれている。またヤングは、戦時中につけていた克明な日記をもとに、晩年『忘れることのありがたさ』（*The Grace of Forgetting*, 1953）を執筆し、大戦を振り返っている。それらの日記の断片は、ハンキンスン（Alan Hankinson）によるヤングの伝記『ジェフリー・ウィンスロップ・ヤング　詩人、教育家、登山家』（*Geoffrey Winthrop Young: Poet, Educator, Mountaineer*）に紹介されている。なお、大戦前に執筆され、戦後の一九二〇年に出版された大部『山の技術』（*Mountain Craft*）は、登山技術だけでなく心構えやリーダーシップなど精神上の問題も議論して高評価を受けたもので、五十人の死んだ山仲間に捧げられているが、その多くが大戦での戦死者であった。

以下、時系列に沿ってヤングの大戦参与を追いながら論を進めていく。

戦場特派員、救急隊

一九一四年夏、ヤングはヨーロッパ・アルプスにいた。類い稀な天候に恵まれて、マッターホルン（Matterhorn, 4478m）登攀などを楽しんでいたが、イギリス参戦の可能性が濃厚になるなか七月二十八日帰国する。トラファルガー広場での平和集会（おそらく八月二日日曜日の大集会）に「文明化された平和の時代に育った者たちの最後の抵抗」（*Young, Grace* 135）として参加する。[4] 本稿冒頭で引用した「浪費」の気分はこうした行動に表れている。とはいえ、彼の冒険心はこの戦争に何らかの形で参与したいと訴えていたようだ。ロンドンで同居していた弟ヒルトンに、リベラル紙『デイリー・ニューズ』から戦場特派員にならないかとの依頼が来たとき、すでに海軍に入隊することになっていた弟に代わって、好機とばかりにヤングは自分が行けまいかと申し出、これが受け入れられるのである。七月三十日にこのことがきま

るや、八月初頭、ヤングはイギリス参戦（八月四日）を目前に控えたフランスに渡る。車と運転手を手配し、主にベルギーの各地を取材、九月まで特派員の仕事を続けた。これらの戦場報告は、十月に『塹壕から』としてまとめられ出版される。

『塹壕から』には味方の兵士だけでなく、捕らえられた敵兵の声や、一般市民たちの様子がつぶさに捉えられていて、貴重な報告となっている。ヤングは塹壕での爆撃も体験するが、ここでも不毛性が際立つ――「戦争の無益さ（'futility'）を印象づけるものとしては、この男たちを見れば十分だ。有益な暮らしを生み出す肥沃な土を耕すための肉体を持ったのに、今は不毛な（'barren'）塹壕で暮らすために穴を掘る、この役に立つ男たちを見れば」（Young, *Trenches* 288）。また、負傷者やその救護に当たる者たちを見たことは、のちのヤングの救急活動につながったであろう。例えば次の、フランス北部の戦線でフランス赤十字による負傷者探索を手伝ったときの挿話。

夜の闇の冷たさ、瞬間的にだけ照らされるライト、静けさのなか時折つぶやかれる命令。それが救急隊の男たちの、確固たる仕事人の勇敢さに、より強い印象を与えていた。近代戦という条件下、それは十分に訓練された神経を必要とする仕事だった。彼らに戦いの興奮はない。「やり返す」刺激もない。彼ら自身が撃たれる可能性が十分あるのに、だ。激しい砲撃が長く続けば……砲弾が人に、家に、荷車に落ちてくる。赤十字をつけていたって、敵にそれは見えないし区別もできない。

仕事は危険で命を落とすことさえあるが、個人的な手柄を得る光栄にはあずかれない、そういう彼らにますます賞賛の意を禁じえない。北海で機雷除去をする漁師のように、彼らは名もない英雄だ。非人間的戦争の影のきわに存在する、人間性の英雄なのだ。（Young, *Trenches* 235）

ここでヤングが、兵士よりもむしろ兵士でない者たちを英雄

と呼んでいることが興味深い。

負傷者救護の不備を痛感したヤングは民間救急隊の組織に動き出す。すでにイギリスではフレンド会の有志が、救急隊を結成し訓練を重ねていた。主導者のフィリップ・ノエル＝ベイカー（Philip John Noel-Baker, 1889-1982）は、ヤングと同じケンブリッジ出身で登山家でもあり、ヤングとも知り合いであった。ヤングは彼らと協力関係を取り結び、First Anglo-Belgian Ambulance Unit として（のちに Friends' Ambulance Unit と改名）一九一四年十月三十日にロンドンを出発する。

ところでこの救急隊は、フレンド会の援助は受けても、会の正式な組織としては認められていなかった。救急隊活動は戦争協力と捉えることができ、クェーカーの間には反対者が多かったからである。しかしフレンド会に所属する若い男たちの間には、入隊しない男に対する社会的圧力に苦しむ者たちが多数おり、救急隊結成はこれに対処する装置として機能した（Palfreeman 12-21）。とはいえ、看護は女、戦闘は男という性的役割分担の概念は第一次大戦において支配的であった（Hammerle 91-92）ことを考えると、救急隊はアンビヴァレントな存在であった。たとえば英国赤十字の救急隊を率いたトレヴェリアン（George Macaulay Trevelyan, 1876-1962）は、救急隊員である自分が良心的兵役拒否者と誤解される――すなわち言外に「男らしくない者」と見做される――ことを嫌い、自分は良心的兵役拒否者ではない、年齢と身体検査結果から「陸軍で後尾につくより赤十字で前線に立つ」のを選んだのだ、と隊の活動記録、『イタリアの戦場から』（*Scenes from Italy's War*, 1919）にわざわざ記した（Trevelyan 40）。いっぽうで赤十字や VAD（Volundary Aid Detatchment）、FANY（First Aid Nursing Yeomanry）などでは、救急車を駆る女たちが活躍し、「女らしさ」の意識を塗り替えた。[5] フレンド会の救急隊はといえば、「男らしさ」への圧力の問題を反映した「男の世界」（Palfreeman 5）であった。

ヤングの立ち位置は、特派員の活動を通じて戦争への憎しみが深まったとはいえ、彼はクェーカーではなく、自らを良

心的兵役拒否者として位置付けてもいなかった。軍人ではないけれどもイギリス軍陸軍少佐の制服を身に纏った彼は、戦闘忌避の理由から救急隊を選んだというよりも、救急隊活動でリーダーシップを振るうことに自らの有益性を見出したと言えよう。そこに「男らしさ」を声高に叫ぶそぶりはないのだが、このジェンダーの問題については後述する。

こうしてヤングは、十一月から翌一九一五年八月までフランドル、主にイープルで救護活動に従事する。一九一四年十二月七日の日記にヤングは書き記す。

> 大変な多忙日。イープルに到着、前夜に七〇もの砲弾が落ちていた。一般市民死亡者十四名。負傷者多数。救急車は午前中ずっと負傷者を運搬。子供五、六名、うち一人は足を切断。女が三人ほど。……道は砲弾があちこち新しく穴をあけて通れない。榴散弾の砲撃はほぼ一日中。危うく被弾しそうになることもあり。（Hankinson 156）

一九一五年二月十二日の日記には、

> 怪我で運ばれてきたかわいい子供が午後八時ごろ死んだ。家族を探さなければ。……ある夜の砲撃で近衛騎兵連隊の兵士十二名死亡、一般市民六名死亡。子供四名死亡。あと四名連れ帰らねばならない。もう一人死亡。医者たちは一晩中手当。午前五時、幼い男の子がまた一人死亡。……もう一人、八歳のかわいい子が腸チフスで瀕死状態……。（Hankinson 160）

また、最初のガス攻撃も間近で体験する。一九一五年四月二十二日、イープルで彼は、「薄黄色の低い雲が東の地平線に立ちのぼる」（Young, *Grace* 232）のを目撃、まもなくその残酷性を目の当たりにした。

> 最初の毒ガス被害者たち。この恐怖は最初あまりに酷くて信じられなかった。……その野蛮さ。床に、戦場に横

たわり黄色い泡に喉を詰まらせて死んでいく男たちの姿は、私を怒りで燃え立たせた。その後のいかなる人間の残酷さも――のちのドイツの、あの醜悪なる収容所による人類堕落の行為でさえ――そんな怒りの炎を吹き上げさせたことはない。というのも、当時の我々はまだ、すべての人が人間だと思っていたからだ。(Young, *Grace* 233)

救急隊、病院、戦争孤児の世話、感染症を防ぐ公衆衛生対策などを仕切ったイープルでの仕事により、ヤングは勲章を授与された(Hankinson 168)。

一九一七年イタリア戦線、サン・ガブリエレ山

ヤングの次なる仕事はイタリア戦線での救護活動だった。今度率いたのは、トレヴェリアンが組織した英国赤十字社による初のイタリア派遣部隊であった。歴史家トレヴェリアンはケンブリッジのトリニティ・コレッジからのヤングの親友で山仲間でもあった。ヤングの第二詩集『自由』は彼への献詩で始められている。部隊はヤングの父親の広大な地所で訓練をしたのち、一九一五年八月末に戦地へ赴いた。隊長トレヴェリアン、副隊長にヤングとノエル=ベイカーがついた(のちにヤングはトレヴェリアンが留守のあいだ隊長を務めることになる)。

イタリアは、南チロルやトレンティーノなど、領有権を主張していた地域の奪回を目指し、一九一五年五月にオーストリア=ハンガリーに対して宣戦布告していた。地理的な条件から、東のジュリア・アルプス山脈を流れるイゾンツォ川沿いの地域が前線となり、救急部隊が赴いたのもこうした地域である。[6]

「一九一七年　サン・ガブリエレ山の戦いのあとで(After the battle on Monte San Gabriele, 1917)」と『全詩集』において付記された詩(初出の詩集『四月と雨』にこの付記はない)を見てみよう。全詩を引用する。

These splendid limbs —
Life lent you them; you did not make nor choose them;
but yours the right to use them
right royally for a span.
When the light dims,
when their day wanes, and all the stars are beckoning,
see you return them proudly for the reckoning,
to prove you lived a man.

In their spring time
dance them with light on every stream and meadow;
race them with rain and shadow,
only moving and free.
In their strong prime
they'll learn the music of more ordered motion,
measure high hills, and meet the moods of ocean
with rhythmic mastery.

If it be meant
heart-stroke and strength shall sound a different ending, —
life linked them for the lending,
and life may halve the loan.
Be then content
to live new music by their altered measure.
Yours still the lordship of their greater treasure;
your heart is still your own.

(Young, *April and Rain* 40)

この素晴らしい四肢(てあし)
これは命がお前に貸してくれたもの　お前は作りも
選びもしなかった
だがこれを使う権利はお前のもの
いっときの間　正しく忠誠をつくして
やがてたそがれ
日が終わり　星がみな手招きすれば

お前は報いとして誇らしくこの四肢を返す
　男の一生を生きた証を返す

　春にはこの四肢
あらゆる小川と草原に照らす光と躍らせよう
雨と影と駆けさせよう
　自由に動くにまかせよう
　絶頂期には
より秩序だった動きの音楽を学ぶだろう
熟練したリズムで
　高い山々を歩き　海の気分のさまざまを
　味わうだろう

　それで
心臓の鼓動と力が　違う終わりを奏でるとしても
命は融資のためにこの四肢をつなぎとめた
　ひょっとしたら借金は半分にしてくれるかも
　だから満足しよう
　リズムの変化した　新しい音楽を生きることに
　この四肢のもつ　より大きな宝　その権利はまだ
　お前のもの
　お前の心は　まだお前のもの

登山家で詩人の藤木九三はこの詩を、登攀の一日を終え、テントの中でよく働いた手足をいたわる姿と読んでいる（藤木27）。藤木がヤング論を書いたのはヤングの『全詩集』出版（一九三六年）よりも前だから、この詩がイタリア戦線での詩だということを知らない。むろんこの詩は藤木のように読み、また彼が付言するように、より広い意味での人生に対する分析として読み手に訴えるものであろう。しかしここでは、後年になって付加された注記通りの文脈において読んでみたい。

サン・ガブリアレ山は、それまで十度に渡って行われてきた「イゾンツォの戦い」に続いて、イタリアが最大の戦力を

投じた第十一次イゾンツォの戦いの舞台である。第一次大戦史を書いたジョン・バカン（John Buchan, 1875–1940）は、自身登山家でもあったが、この山を次のように描写する。

サン・ガブリエレは長い尾根である。最高点六四六メートル。ゴリツィアに向かって、また東と北に向かって急斜面に落ち込んでいる。しかし西は斜面がそれより緩やかにイゾンツォ川に下る。尾根は一番広いところで約八〇〇ヤード、尾根の全長は二〇〇〇ヤードぐらい。山頂部は非常に急で、南アフリカでよく見られる「カストロル」、つまり深鍋型の山に似ていなくもない。山そのものが一つの巨大な要塞になっていて、洞窟やトンネルが蜂の巣状に掘られている。いまやオーストリア軍前線の突端部となっていて、三方をイタリア軍に囲まれ、北部のみが主前線とつながっていた。……この戦争の比較的規模の小さい諸戦闘の中でも最も激しい戦いが、この数千平方フィートの岩と塵の上で行われたのだった。（Buchan 21–22）

ヤングはこの戦場で救護活動を展開した。一九一七年八月二十九日の日記には次のようにある。

急な坂道は、耕した畑にブロックを撒いた、という有様だった。古い鉄条網も邪魔だし、猛烈な砲撃の跡で穴だらけ。道は、鞍部まで一五〇〇フィートほどジグザグに上がる。騾馬たちや、神経質になった影のような兵士たち、水を積んだ荷車や、負傷者たちが邪魔で、まともに走れない。「岩角」と呼んでいるところでひどい渋滞が起こっていた。その向こうの道をフン族どもが砲撃しているのだ。……長い道のりをのろのろとのぼっていかなければならなかった。機関銃の弾がひっきりなしに空を切るなかを、だ。……砲弾が一発、我々の頭上の崖に命中し、一群の岩片を車の上に降らせた。岩のかけらが私のブーツのかかとに当たる。（Hankinson 192）

このような悪条件の中、八月三十一日、ヤングは帰ってこない工兵の様子を見にガブリエレ山に向かった。立ち往生する騾馬たちを追いやりながら徒歩で車を先導していた際、敵砲撃が炸裂した。ヤングの回想によれば、「突然、私は外側にいた」という。

> 私は自分の背後に立って、反対の山壁を後ろにした自分自身を見ていた。その「自分」は、金属のバネが二本高く伸びている姿に見えた。短いほうが傾いてもう一本につながっている。爆撃を受けた左腿がつながっているあたりだ。(Young, *Difference* 122)

このままでは死ぬと感じた彼は急いで一方のバネの螺旋を戻って行って、本来の自分と合体したという。ヤングは治療所へ搬送され緊急手当を受ける。この時点ではまだ脚は失われていなかったが、損傷がひどく、結局九月七日に膝上切断手術が行われた。ヤングは『ひと味違う山』のサン・ガブリエレ山の章を次のように締めくくる。

> サン・ガブリエレは私の現役時代最後の登山だった。そしてその登頂は果たせなかったのである。それは両軍も同じだった。恐るべき損失を出したあの劇的な戦いで、どちらの大軍もその頂上を支配することはなかった。(Young, *Difference* 123)

このような山の磁場に置かれた時、上記の詩は特異な響きをもって迫ってくる。第三連は左脚切断による変化(‘a different ending’, ‘their altered measure’)と読めるだろう。もはや以前のリズムでの歩行は不可能、ましてや高山登攀への復帰などありえない。驚くべきは、しかし、そこに「切断」や「喪失」の気分がないことだ。四肢はむしろ「繋がれ(‘linked’)」る。四肢は、「変化したリズム(‘altered measure’)」を持つ「より大きな宝(‘greater treasure’)」へと韻を踏みつつ成長する。ここには断絶ではなく、‘link’と、二度繰り返される‘still’に

よって強調される持続がある。'l' 音と 'n' 音は 'lending' や 'loan' の持つ、借金の継続というおもしろいイメージと響きあう。だがそれはまた、やはり二度繰り返される 'life' および 'live' とも呼応して「命」という大きなカテゴリーに統合される。この連の足取りである詩脚も、脚韻（abbcaddc）同様、各連変わらず、確かで乱れがない。これがこの詩の一行目で言う、'These splendid limbs' の姿だ。このとき左脚は腿の下から存在していないはずであるが、詩はここに完全なる四肢を見ているかのようである。

戦傷による四肢の切断という視点から第一次大戦における男性性を研究したジョアナ・バークの『男の切断』によると、大戦で四肢のいずれかを失った軍人は四万一千人以上。内訳は片脚切断が約六十九パーセント、片腕切断が約二十八パーセント、両脚または両腕切断が約三パーセント。英国の歴史において、第一次大戦ほど人体にダメージをあたえたことはなかったという（Bourke 33）。こうした四肢の損失が大義のための英雄的自己犠牲として賞賛される一方で、当人たちは自身の男性性の喪失を嘆くことになった。彼らは大黒柱としての役割を果たせず、社会復帰のためにあたえられたリハビリ的な仕事を「男の仕事」とみなすこともできず、また、独身男性は結婚の望みを持たなかった（Burke 31–75; また Meyer 97–127）。戦地で兵士たちは手足損失の恐怖に怯えた。前線を離れることができたある兵士は次のように日記に書いた――「こっちに来て本当に良かった。風呂に浸かって自分の両腕両脚を見ると、バカみたいだがそれがまだ全部そこにあるのが嬉しいと思ってしまう。」（Burke 56）。こうした意識と対照的に、失われた片脚を含めた四肢を見つめるヤングの詩の語り手は、それらを「すばらしい（splendid）」と全肯定し、そこに男性損失の恐怖はない。

ところでこの詩は、手術前のヤングの思いに似るところがある――「手術直前、私は裸足の両足を並べて、最後の対話と見送りをした。本当にたくさんの冒険をしてきた、頼りになる親友よ！　と」（Hankinson 198）。これは九月七日術後直後の日記の記述だが、文章は「術後一週間は危うい状態が

続いた。」という簡潔な書き込みで終わる。その危険状態は二ヶ月後なってようやく、新しい日記帳とともに振り返られる。ヤングはそのとき脚の損失よりも、むしろ精神の崩壊または生命の危機を感じたようだ。日記は詩と逆に、断絶のイメージに覆われる――「何を考えてもすべて真っ赤に腫れた末端のイメージで終わった。のびた蔓がバラの蕾でブツッと終わるような。何を考えても、なにかぞっとするような事故、包帯、切断のことになってしまい、真っ赤な末端のイメージになる。そうなるたびに私は意志のシャッターを下ろした――そんなことは考えないぞ！　と」（Hankinson 198–99）。

この詩がどの時点で書かれたものかは残念ながら分からないが、先述したように、一九三六年の『全詩集』において連詩「山の気分」第一番となり、「満ち足りて」という新しい題と、「一九一七年、サン・ガブリエレ山の戦いのあとで」の付記が加えられたことは重要である。ここに来てようやく、この詩は、ガブリエレ山での戦傷による片脚切断にひとつの回復の形を与えるものとして存在することになったという。

一九一八年イタリア戦線、サン・ガブリエレ山再び

ヤングの左脚切断手術からの養生もままならぬうち、一九一七年十月、イタリア・オーストリア戦線にはドイツ軍が加わり、ドイツ・オーストリア軍の進撃はイタリアの防衛線を次々に破っていく。トレヴェリアンとヤングの救急部隊も撤退。悪路で車が動けなくなると松葉杖で歩き、川は担架に乗せられて渡るなどしながらの撤退路であった。ヤングは養生のため一九一八年一月にイングランドに帰国する。しかし彼は、五月に再びイタリア戦線に復帰するのであった。

'The Italian front, 1918' と付記された、「四月の歌」七番の詩を次に検討したい。全文を引用する。

The wintry light from this far view of sea
flashes April at me.

It wavers up the rent walls of my room
　　in whiteness of her bloom.
Good sun of winter, bring the wave-light near,
that I may dream awhile April is here.

A long wind from the bend of hostile hill
　　sings to me of April;
quick with a keen cool flutter, like the beat
　　of her light blossom feet.
Kind foreign wind, ring rain-gusts on the grass,
that I may hear my dancing April pass.

But best I love these orchards. In leaf-green,
　　laughter still lurks between
cluster and fruit-bud. Black and wintry bare,
　　memory still meets me there
　　in mimic dance behind
their shattered branches, charred against the wind.
If blossom break, each petal lifts a wing
　　of April's dancing spring!
Grey with sea light, bent with winds from the hill,
my orchard fills my heart with April still. .

(Young, *April and Rain* 15)

遠く海の眺めから冬の光
　　私に四月を照らしてくれる
光は　私の部屋の破れた壁に揺れる
　　四月の花ざかりの白さが揺れる
冬の善き太陽よ　波の光をもっと近くにつれてこい
ここに四月がいる夢を　ほんのしばらく見たいから

敵意ある山の　曲がり道から長い風
　　私に四月の歌を歌ってくれる
素早く鋭く涼しいトレモロ
　　四月の花の軽い足取り

やさしい外国の風よ　草原に雨突風を鳴らせ
踊る私の四月が　通りすぎるのを聞きたいから

だが私が一番好きなのは　この果樹園
　葉の緑に　房と芽の間に
じっと潜む笑い声　　黒く　冬らしくむき出しの
　記憶がまだ私に会いに来る
　　砕かれ　黒焦げ　風に吹かれる枝の後ろ
見せかけの踊りを舞いながら会いに来る
もし花が咲くなら　花びら一つ一つが持ち上げる
　　四月の踊る春の羽根を！
海の光に灰色に　山の風にたわみつつ
私の果樹園は　私の心をじっと四月で満たす

裂けた壁、敵が潜む山、砲撃で破壊され焦げた果樹園。こうした冬の戦場の風景に、春の陽光と西風は似つかわしくないのだが、この詩をヤングの伝記的文脈に置くと、まずこの「前線」は終戦後のそれとして読め、そして四月の存在感の理由もわかる。

一月に帰国したヤングは、四月二十五日に友人の登山家ウィリアム・スリングズビー（William Cecil Slingsby, 1849–1929）の娘で旧知の仲だったエレナ・スリングズビー（Eleanor Slingsby, 1895–1994）と結婚する。戦前のプロポーズは断られていたが、今回はホモセクシュアリティーの性的傾向を打ち明けたうえで受け入れられた。四月という月は彼にとって重要な意味を持つことになり、戦後に出版した詩集『四月と雨』のライトモチーフとなる。しかし彼にとっての戦争がそれで終わったわけではない。ヤングは五月末イタリアに戻り、義足で救急隊に復帰する。イタリア軍は、イギリス、フランス、アメリカの援助を受け戦線を立て直しており、十月に決定的な攻勢をかけ、オーストリア＝ハンガリー軍に勝利する。ヤングは十一月四日のイタリアとオーストリア＝ハンガリーとの休戦協定発行をボローニャの病院で迎えた。二度目の手術を受け、まだ体に残る砲弾の破片を取り除いたので

ある。エレナがそこに駆けつけ、彼女はヤングの救急隊に入隊する。部隊は終戦の混乱のなかで困窮する人々を救う仕事に従事した。彼らの救護トラックは、かつての戦地を走る。

彼女は私と一緒にトリエステに入り、サン・ガブリエレ山を越え、イゾンツォ前線をずっと走った。山道の脇に据えられた大砲は錆びていた。軍用物資置場は早くも蔓や果樹の新しい葉に覆われ姿を消そうとしている。帰ってきた農民たち――黒髪のラテン系たちや太綱みたいな金髪の三つ編みを盛り上げたスラブの女たち――も、よそ者を見るかのように我々の制服に顔をしかめた。

（Young, *Grace* 340–41）

終戦を迎えた戦地には農民が帰り、すでに日常生活を始めようとしていた、とヤングは回想する。彼が脚を失ったサン・ガブリエレ山をトレヴェリアンが次のように描写したのはほんの一年前のことである。

ある朝は道端に、三〇人の男たちが土埃にまみれた山となって死んでいるのを見た。別の時は、頭部や手足が岩と一緒に道に散らばっているのを見た。上のほうの塹壕の様子はまちがいなくもっと酷いだろう。一九一七年九月前半のサン・ガブリエレは身も凍る屠殺場だった。

（Trevelyan 160）

不毛の地と化すかに見えた山と果樹園はこの詩でも再び実りを約束しようとしている。四月は来たるべき平和時の春であるが、しかし、詩人にとっては未来のそれであると同時に、片脚喪失のあとに訪れたエレナとの結婚月でもあった。そしてその四月の象徴といえるエレナは今かたわらに存在する。戦時の記憶と終戦後の風景、十一月の冬景色と春の風と雨、現在と過去と未来とがこの詩において混交するが、それは決してコラージュ的断片とはならない。詩は行末の‘still’に現れるような持続性の気分をもって終わる。この語はもちろん‘April’と、そして‘hill’、‘fill’と韻を踏み、この山を満たす。

戦没者記念式典、グレート・ゲイブル山

一九一八年十二月、役目を終えた救急隊は解散した。英国赤十字はイタリア戦線で約四〇万人の傷病者を運んだ。うち、トレヴェリアン／ヤングの救急部隊は三年四ヶ月の任務で一七万七千五二二人を搬送、救急トラックは百三十一万九千三一六キロを走った（Trevelyan 235）。隊員たちにはイタリアやイギリスから五〇あまりもの勲章が与えられた（Young, *Grace* 282）。一九一九年の復活祭、戦前ヤングが恒例に開いていた北ウェールズのペナパス（Pen-y-Pass）での集まりが再開される。戦争で失った仲間の多さに開催を渋るヤングを、エレナが説き伏せて実現したのだった。ここでヤングは義足で初めての岩登りに挑戦し、トリファン山（Tryfan, 918m）の一部（Gashed Crag）を、万一のためのロープに守られながらとはいえ登りきる。ヤングの国内登攀が再開された。

こうした国内登山の中でも重要なのが一九二四年六月八日のグレート・ゲイブル（Great Gable, 899m）登山であろう。聖霊降臨祭の日曜日にあたるこの日、[7] 湖水地方のグレート・ゲイブル山における、フェル・アンド・ロック・クライミング・クラブ（Fell & Rock Climbing Club）主催の式典にヤングは招待されていた。クラブは大戦で失った仲間たちを偲び、グレート・ゲイブルを含む三千エーカーの土地を購入してナショナルトラストに寄付、会員の戦没者二〇名の名を彫った記念碑を山頂に据えた。そこにはエレナの兄ヒルトン（Hilton Laurence Slingsby, 1893–1917）の名前、そして大戦前の夏にヤングが共にアルプス登山をしたシーグフリード・ハーフォード（Siegfried Herford, 1891–1916）の名前もあった。ヤングはこの除幕式典でのスピーチを、旧知の仲である会長のアーサー・ウェイクフィールド（Arthur Wakefield, 1876–1984）から依頼されたのである。グレート・ゲイブル山頂までのような長い道のりを義足で歩くのは、この頃のヤングにとってはまだ初めてだった。当日は強い風雨で道のりは厳し

かったが、なんとか山頂にたどり着き、集まった人々――式典を報じた新聞の一つ、『タイムズ』紙によれば五〇〇から六〇〇人――に加わることができた。雨が止み、彼の話す番になった。ヤングは述懐する。

> 私の心には静かな確信があった。これから私が語るのは別れの言葉だ。それは、過去に私の友であった者たちへの別れであるだけでなく、いま私のまわりで雲に覆われているこの山々との盛んな交流に歓喜していた若き自分自身との別れでもあった、と。太陽の光の筋が現れ、それは悲しい別れではないと保証してくれた。（Young, *Difference* 148）

彼は追悼の辞を述べたが、それは「山に向かって語りかけ」また、「山がこれまで自分に語りかけてきた」言葉であったという（Young, *Difference* 149）。

> この山の頂に今日私たちは集まりました。この一帯の山々を「自由」に捧げるためにです。この岩の上に、男たちの名前が据えられています。私たちの山上の兄弟、われらの同志たちの名前です。彼らは、私たち同様、人間の精神が束縛されているところに大地の自由などないと信じたのです。……このシンボルに私たちは、私たちに与えられた二重の信託を確信します。それは山だけがその子供たちに託すことができるものです。自由のなかに備わる力を訓練すること。そして、たゆまぬ奉仕を通して魂を自由にすること。この二つを自由な山々はいま一度、そして永遠に、私たちに与えてくれるのです。（Young, *Difference* 149）

ヤングが戦前に出版した詩集の題名が『自由』（*Freedom*）であったことを考えると、この式辞に「自由」という言葉が何度も繰り返されることは興味深い。軍医として地獄を見た戦争の傷から立ち直ることのなかったウェイクフィールド

(Davis 3-39) と対照的に、ここには山と共に戦傷から回復し新生するヤングの姿が見られる。

一九二七年、ヤングは満を持して、十三年ぶりにヨーロッパ・アルプスに復帰し、モンテ・ローザ (Monte Rosa, 4634m) 登頂を果たす。翌一九二八年にはマッターホルン登頂。それを報じる記事は、マッターホルンの前に登頂を試みた (雪崩の危険のため登頂は果たせず) ヴァイスホルン (Weishorn, 4506m) の急峻な岩場に立つ写真とともに『タイムズ』紙や『デイリー・テレグラフ』紙などに掲載された。この登頂はヤングにとって象徴的なもので、「戦争で腕や脚を失ったヨーロッパのすべての人々を勇気づけ」、彼らが苦しむ無力感が「神経の生み出す作り物」に過ぎないことを示す、という目的が一つにはあったという (Young, *Difference* 193)。

おわりに

ヤングはその身振り、そしてその詩によって、戦傷を負いながらもそこから見事に回復する姿という型を示した。[8] しかしそうした型にはある種の危うさが存在するとカーデン＝コインは言う。戦傷とジェンダーとの関係を分析した彼女は、戦傷にまつわる言説に「男らしさ」による抑圧を見る。つまり、戦争で身体を欠損することは男らしい英雄的犠牲であると賞賛されるが、同時に、欠損によって男らしい身体・意識は失われる。その女性化された身心をリハビリテーションによって克服し、再び男らしさを取りもどしてこそ男である。そういう言説が戦傷者を取り巻く。国家にとって有用な兵士を再生産していく「軍事モデル」がそこにある、というのだ (Carden-Coyne)。これを規範とすれば、例えばオウェンの詩「身障者」('Disabled') における、片腕片脚を失った戦傷者が繰り返す男性喪失の叫び——「女たちはどうして来てくれな

い」（Why don't they come?; Owen 176）――は、許されざる嘆きであろう。それと対照的なヤングの言行はこの軍事モデルと親和性が高い。

ヤングは一九二七年に出版した『高き山々』で、戦争と登山という二つの「冒険」について述べている。

三日後――一九一四年八月――嵐が起きた。わたしはふたたび故郷を離れてそれに相対した。山のことを考えると、こんな風に思ったりもした――俺はようやく悟るべきではないか、山で感じた興奮は見せかけに過ぎない、静かな暮らしから冒険を作り出そうと自分を騙していたに過ぎない、そういう自己欺瞞を世間は「冒険」と呼んでいるに過ぎない、と。戦闘のスリル、迫る危険を予測できる可能性がより低い世界、それこそが皆が言うように「本物」なのではないか、と。しかし、発熱を繰り返しながら延々と恐怖に震える戦争をふた月ほども自ら経験したら、そうした疑問に対する答えは出た。常に変わらぬ、完全な答えが出た。それは、自然に反する死と破壊に対する、怒りと憐れみに満ちた魂の反応だった。イープルの爆撃をたった一週間でも、そして下界を見晴らすマッターホルンの山行を一日でも経験した者が、どうして死の耳障りな単調音と生の深い共鳴音とを同列にならべられようか。……山の息は、我々に命を与える人道的なものなのだ。山のもつ危険はそれこそ、頑強、正直、自己発見への刺激剤だ。山は我々の仲間に死をもたらしたが、その者たちにとってさえ、山は、まず彼らに命を正しく味わう力を与えてくれた。正しく生きる知恵を与えてくれたのだ。生きることにおいて、いつか死ぬかもしれないということは、より高い価値のあるものの中にあっては、取るに足らないことなのだ。（Young, *High Hills* 343）

ヤングはここで山と戦争を峻別する。しかし彼は別のところで、いざ戦いとなったら、山で鍛えた肉体と精神が大いに役

立つと主張してもいる。第二次世界大戦の時期には新聞紙上でその主張を訴えもした（Young, 'Stamina'; 'Training'）。上述の第一次大戦戦没者追悼スピーチにかえってみれば、山が与えた二つの課題――「自由のなかに備わる力を訓練」し、「たゆまぬ奉仕を通して魂を自由にする」――この「訓練」と「奉仕」を発揮して男たちは戦い抜いた、ということになる。むろんヤングの意識としては、まず戦争ありきではなく、山があって、それが戦争でも有用であるという順序であろう。山が主であり軍事モデルは従である、と。しかしその主従関係は常に安定したものではないであろうし、そもそも主従関係を取り結ぶことができる親和性をもつことは無視できない。

註

1　もっとも、一九一六年に可決される兵役法案では十八～四十一歳独身男性が徴兵される（小関 15–44）。

2　Das xli–xliii. ただし、Reilly による文献目録 *English Poetry of the First World War* にはヤングの『全詩集』の記載がある（Reilly 346）。

3　ヤング詩の評価については拙論（佐藤）参照のこと。また、ヤングはブルック（Rupert Brooke, 1887–1915）やグレイヴズ（Robert Graves, 1895–1985）やサスーン（Siegfried Sassoon, 1886–1967）を個人的に知っていたが、こうした他の詩人の大戦詩をどう読んだか、また、モダニズム詩をどう読んだかについては残念ながら不明である。

4　ハンキンソンの伝記には、ヤングが八月一日にはパリにいたとあるが、根拠不明である。『塹壕から』には、'On Tuesday, 28th of July, I returned from the Alps. . . . On Thursday [30 July] volunteered to go with the Servian Army as War Correspondent for the *Daily News*. . . . On Sunday [2 August], it was arranged that I should go to Paris to join the French Army.' とある（Young, *Trenches* 7）。

5　第一次大戦における女性による救護・看護活動については荒木を参照した。

6　イタリア戦線については、ウィルモット、ハート、コラリーツィ、および Buchan、Trevelyan を参照した。

7　デイヴィスが活写するように、奇しくもこの日は、ジョージ・マロリー（George Mallory, 1886–1924）とサンディ・アーヴィン（Andrew Irvine, 1902–1924）がエヴェレストで消息をたった日だった。ヤングはエヴェレスト隊結成に際して大きな貢献をしている。

8　この回復には、上流階級ゆえの資財によるところが大きかったことを無視するわけにはいかないだろう。ヤングは高品質の義足（普通生活用と、特別に開発した登山用の二つ）を入手できたし、肉体労働ではなく、執筆など知的労働による収入があった。

参照文献

Bourke, Joanna. *Dismembering the Male: Men's Bodies, Britain and the Great War*. London: Reaktion Books, 1996.

Buchan, John. *Nelson's History of the War: Volume XXI. The Fourth Winter of War*. London: Thomas Nelson and Sons, n.d.

Carden-Coyne, Ana. 'Gendering the Politics of War Wounds since 1914.' *Gender and Conflict since 1914: Historical and Interdisciplinary Perspectives*. Ed. Ana Carden-coyne. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2012.

Das, Santanu, ed. *The Cambridge Companion to the Poetry of the First World War*. New York: Cambridge UP, 2013.

Davis, Wade. *Into the Silence: The Great War, Mallory, and the Conquest of Everest*. New York: Vintage Books, 2011.『沈黙の山嶺　第一次世界大戦とマロリーのエヴェレスト』秋元由紀訳、東京、白水社、二〇一五年。

Hankinson, Alan. *Geoffrey Winthrop Young: Poet, Educator, Mountaineer*. London: Hodder and Stoughton, 1995.

Hämmerle, Christa. '"Mentally broken, physically a wreck . . .": Violence in War Accounts of Nurses in Austro-Hungarian Service." *Gender and the First World War*. Ed. Christa Hämmerle, Oswald Überegger and Brigitta Bader Zaar. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2014.

Meyer, Jessica. *Men of War: Masculinity and the First World War in Britain*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2009.

‘Mountain War Memorial.’ *The Times* 9 June 1924.

Owen, Wilfred. *The Complete Poems and Fragments*. Ed. John Stallworthy. London: Chatto & Windus, 2013.

Palfreeman, Linda. *Friends in Flanders: Humanitarian Aid Administered by the Friends’ Ambulance Unit during the First World War.* Brighton: Sussex Academic Press, 2017.

Reilly, Catherine W. *English Poetry of the First World War: a Bibliography.* London: George Prior Publishers, 1978.

Trevelyan, G. M. *Scenes from Italy’s War.* London: T. C. & E. C. Jack, 1919.

Young, Geoffrey Winthrop. *Freedom: Poems*. London: John Murray, 1914.

——. *From the Trenches: Louvain to the Aisne, the First Record of an Eye-Witness*. London: T. Fisher Unwin, 1914.

——. *April and Rain: Poems*. London: Sidgwick & Jackson, 1923.

——. *Collected Poems of Geoffrey Winthrop Young*. London: Methuen, 1936.

——. *On High Hills: Memory of the Alps*. 5th ed. London: Methuen, 1947.

——. *Mountains with a Difference*. London: Eyre & Spottiswoode, 1951.

——. *The Grace of Forgetting.* London: Country Life, 1953.

——. ‘A One-Legged Climber.’ *The Times* 2 August 1928.

——. ‘Stamina in War.’ *The Times* 30 March 1942.

——. ‘Training for Fitness.’ *The Times* 2 February 1944.

荒木映子『ナイチンゲールの末裔たち　「看護」から読みなおす第一次世界大戦』東京、岩波書店、二〇一四年。

ウィルモット、H・P『第一次世界大戦の歴史大図鑑』五百旗頭真、等松春夫監修、山崎正浩訳、大阪、創元社、二〇一四年。

小関隆『徴兵制と良心的兵役拒否　イギリスの第一次世界大戦経験』京都、人文書院、二〇一〇年。

コラリーツィ、シモーヌ『イタリア二〇世紀史　熱狂と恐怖と希望の一〇〇年』村上信一郎監訳、橋本勝雄訳、名古屋、名古屋大学出版会、二〇一〇年。

佐藤泰人「ジェフリー・ウィンスロップ・ヤング——アルピニ

ズム黄金期以降の山岳詩」『白山英米文学』四十二号、一―二二頁、二〇一七年。
ハート、リデル『第一次世界大戦　上・下』上村達雄訳、東京、中央公論新社、二〇〇〇年。
藤木九三『雪山散歩』東京、三省堂、一九三三年。